

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
統合医療学寄附講座
医師・医学博士 狭間 研至

第15回 薬学的判断の発揮が変えるチーム医療での立ち位置

薬剤師の専門的な見解や知識は チーム医療の中で発揮できているのか

チーム医療の中での立ち位置を明確にするためには、自分が1人では何もできないということを実感するとともに、「自分がいなければ医療が進まない」ということを、自他共に認めていなければなりません。この点を改めて考えてみるのが、薬剤師の立ち位置を問い直すことになるのではないかと思います。

そもそも、薬剤師は医師の処方監査し、必要な疑義があれば照会・解消した上で、正確・迅速に調剤し、わかりやすい服薬指導とともにお薬を投与し、一連の内容を薬歴に記載するというのが仕事として捉えられてきました。在宅医療や病棟でチーム医療を展開するときには、例えば、服薬指導をベッドサイドで行ったり、在宅や病院で薬の整理を行うなど、活動の場所は薬局や薬剤部から広がってきましたが、基本的には、医師の処方があって、それに基づいて動くということであったのではないかと思います。

でも、よく考えてみると、これでは薬剤師の専門的な見解や知識が出ないのです。というのも、薬剤師が薬学部で学んでいる、基礎薬学や物理化学をベースにした薬理学・薬物動態学・製剤学といった知識は、基本的には薬が体に入った後どうなるかということの時系列とともに読み解く学問だからです。もちろん今までは、薬が体に入るまでのところで薬剤師が専門性を発揮するところはあったわけです。粉薬を0.3mg量りとるなどは、調剤の手技を習っていないとできませんし、たくさんある薬の名前や効能・効果、作用機序や副作用、用法・用量などは、薬剤について学生時代から慣れ親しみ、日常的に多くの薬剤を扱って調剤業務にいそしんできた薬剤師しかできなかったはずで

しかし、今や時代は変わりました。0.3mgは分包装が発売されていたり、機械が正確に量りとってくれます。また、医薬品の名前がわかればインターネットで

基本情報は誰でも瞬時に入手できるようになりました。

病棟業務の拡充、外来化学療法の実進、緩和医療分野での活躍など、薬剤師が取り組むべきフィールドや扱う薬剤は、より高度化し複雑化してきましたが、今までのパラダイムの中では、薬を準備し、調整し、説明するという「薬が体に入るまで」しかないということになってしまいます。お気付きのように、これだけでは、薬剤師が薬学的な専門性を確立し、薬剤師しかできない決断をすることはできません。前述したように、薬学部で学ぶ内容は「薬が体に入った後どうなるか？」を読み解くことがほとんどであるからです。

「薬学」に基づいた判断を駆使し チーム医療に不可欠な存在へ

私自身は、10年ほど前から薬剤師がバイタルサインを採集したり活用する意義は大きいのではないかと感じてきましたし、それらを実際に使用する領域としての在宅療養支援の現場の在り方を模索してきました。その中で気が付いたのは、調剤した薬剤を服用している患者さんの状態を、薬剤師自らが確認・把握することで、薬剤師が薬学に基づいた専門的な判断や決断ができるようになるということでした。そして、これらができるれば、チーム医療を進める中で、薬剤師が必要不可欠な存在になるということを実感してきたのです。

私が理事長を務めている日本在宅薬学会では、バイタルサイン講習会を主催しています。そこで重要だと考えてきたのは、バイタルサインという手技にとどまらず、それらを活用すると決めた後に訪れる薬剤師の大きな変化、まさに、パラダイムシフトです。これが起これば、「薬剤師がいなくては医療は進まない」ということを、医師も看護師も、患者さんや家族も、さらには薬剤師自身も実感するようになります。こうなると、チーム医療の中での薬剤師の役割は、従来よりもっと大きく重要なものになると考えています。